利根・沼田の教育

発 行 所　利根教育事務所
発 行 人　横坂　隆司
〒 378-0031 沼田市薄根町 4412 番地
TEL 0278-23-0165　FAX 0278-23-0180
E-mail：tonekyou@pref.gunma.lg.jp

「自己有用感」について考える

利根教育事務所長　横　坂　隆　司

夏の高校野球甲子園大会でよく見る光景です。負けている高校の最後の攻撃もツーアウトとなり、背番号が１０番台の選手が代打で登場します。アナウンサーが「地区予選と甲子園を通じて初めての出場です」と紹介しています。そんなとき、いつも、「この子はどんな背景をもつ選手なんだろうか」と想像してしまいます。

中学校でソフトボール部の顧問をしているとき、背番号１１の補欠の子どもがいました。その年は、３年生が１０人以上いたため、正選手として試合に出場できない子どもが数人いました。彼女もその一人でした。力強いバッティングをするものの、確実性という点で課題があり、彼女の出番は、代打での出場でした。

ソフトボールでは、１塁と３塁のランナーコーチを選手から出さなければなりません。私が指導するチームでは、バッテリーを除いた前の回の最後から二人のバッターをランナーコーチにあてていました。しかし、彼女は、自分から進んでランナーコーチを引き受けました。１０年以上ソフトボール部の顧問をしましたが、自らランナーコーチを希望したのは後にも先にも彼女だけです。

ランナーコーチの主な仕事は、ランナーに対する指示ですが、彼女は違いました。コーチャーズボックスから人一倍大きな声で、チームの応援をします。しかも、ずっと声を出しっぱなしです。ある監督から「あの背番号１１のランナーコーチは素晴らしい。自分が試合に出ないのに、あれほど一生懸命にチームを応援する子どもは見たことがない。チームの象徴のように感じる」と賞賛されました。

チームのミーティングの際、その監督の話を子どもたちに伝え、試合に出られなくてもチームの一員として人一倍頑張っている彼女を褒めたたえました。彼女の応援は更に磨きがかかりました。「先生、私はチームのために頑張ります。だから、相手チームのベンチに近い方のコーチャーズボックスに立たせてください。相手チームの応援に負けません」そう言って、部活動を引退するまで、相手チームのベンチ前から、大きな声で応援を送り続け、チームに活気と勇気を与えてくれました。

最近、「自己有用感」という言葉がよく使われます。「自己有用感」とは、集団の中で、「人の役に立った」「人から認められた」と感じ、自分を肯定的に評価することだと考えます。背番号１１の彼女は、「自己有用感」を感じ、そこにやりがいや誇りを感じたのだと思います。まさに「自己有用感」をもつことで、物凄いパワーを発揮することが出来た例です。子どもが自信をもって行動できるよう、学習や行事など、様々な教育活動において、「自己有用感」を感じさせるよう、意識的に働きかけたいものです。

冒頭の、甲子園に代打で登場した補欠選手の背景を想像してしまうのは、背番号１１番の彼女の姿に重ね合わせ、彼も「自己有用感」を感じている選手であってほしいと願っているからかも知れません。

授業における自己有用感を高める指導

先生の授業では、自己有用感を感じている子どもはどのくらいいますか？

生徒指導担当

えっ…、あまり意識したことはありませんでした。
ねらいは十分意識しているのですが…。

授業者

利根沼田管内では、いじめ防止活動の一環として、子どもたちの自己有用感を高める取組が進められています。今回は、日々の授業（主に教科指導）における自己有用感を高める指導のポイントを紹介します。

ポイント：子どもが「認めてもらいたい」ところを褒めること

例えば、学習に取り組む際などに、目標や工夫する点、努力する点などを子ども自身に考えさせておき、その点からよさを見取って褒めるようにします。

【例】小学校３年：音楽（「音楽づくり」、題材名「自分なりに工夫して、星空の音楽をつくろう」）

（みのるくん）

「はじめに一番星がきらっと光って、だんだん星が増えていき、最後はたくさんの星が輝いている」という音楽をつくりたいと思います。

どのような工夫をするか、ワークシートに書いてみましょう。

＜ワークシート＞

- 一番星のきらっとした感じには、トライアングルを使う。
- 星の数に合わせて、だんだん音量を上げる。
- 最後は教室に音を響かせて輝く感じを出す。

〈発表後〉みのるくん、トライアングルの音が星の感じに合っていましたね。星の数の変化に合わせて強弱をつけたことがとても効果的でした。強弱の工夫は友達のお手本にもなりましたね。

一番頑張ったところを先生に褒めてもらえたぞ。友達の役にも立って嬉しいな。

各自の工夫点について、表現を工夫する活動の途中で意見交流させたり、つくった音楽を発表する際に相互評価させたりしても、自己有用感を高めることにつながりますね。

ポイント：一人一人の子どもが活躍できる場面をつくること

例えば、一人一人のよさや得意分野等を把握し、授業中に意図的に指名したり、「発表してみんなに教えてね。」などと授業前に個別に声をかけたりする工夫があります。

【例】**〈授業中〉** 小学校３年：書写（「点画の種類」）

あおいさん、毛筆の穂先を上手に動かして「はね」が書けていますね。みんなの前でお手本を見せてください。

はい！

（あおいさん）

〈授業前〉 小学校３年：理科（「昆虫と植物」）

たかしくんは昆虫博士だから、次の理科の時間のはじめに、テントウムシはどんなところで見かけるかを発表してくれますか。みんなのヒントになると思いますよ。

まかせといて！

（たかしくん）

学校全体で効果を上げるためには、子どものよさや得意分野等を、先生方で共有しておくことが大切です。

わかりました。このように自己有用感を高めながら、ねらいを達成できるようにしたいと思います！

自己有用感は、子ども自らが主体的に取り組む活動の中で高められます。学習を子ども主体にするということにも心がけ、取組の充実を一層図っていただければと思います。

＜参考＞「生徒指導リーフ」Leaf.9･18、Leaves.1 （国立教育政策研究所）